

文化遺産の「拡張」

——サンティアゴ巡礼路に描かれた矢印

どい きよみ
土井 清美

青山学院女子短期大学兼任講師

近年、世界遺産委員会は、経路沿いに点在する複数の構成資産の登録（シリアル・ノミネーション）を奨励している。日本の熊野古道もその一例だ。サンティアゴ・デ・コンポステラ巡礼路は、そうした動きより早くに登録され、今ではモデルになっている。

登録された「道」と徒歩巡礼の人気

スペイン北部に、聖ヤコブゆかりの町、サンティアゴ・デ・コンポステラがある。ここに至る道は「ヤコブの道」とよばれ、西欧各地を網目状に走り、スペイン国内にも同名のルートがいくつもある。なかでも、世界的にも珍しく「道」が世界文化遺産として西仏それぞれで登録されているのが、そこへ至る総延長約一〇〇〇キロメートルの巡礼路である。

近年、この非常に長い道のりをあえて徒歩や自転車ですべての町、サンティアゴまで目指す人が増えている。もっと楽に目的地サン



サンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂

ティアゴに行く方法があるのに、徒歩で目指す彼らの多くは、「観光客」ではなく「巡礼者」であることを自認する反面、道中にある教会堂のミサに立ち寄り、そこにはほとんどいない。いかなる動機であれ、迷ったり立ち止まったりしながらの徒歩の旅が「遍歴する巡礼者」の意識をかたちづけている。

世界遺産委員会による対象範囲拡張

二〇一五年、世界遺産委員会



スペインにあるサンティアゴへと続く道

は、当該の巡礼路に他のルート（と建造物群）を追加した「拡張登録」を承認した。つまり、文化遺産として指定される範囲が広がったのである。今回の拡張決定までのプロセスでは、既存ルートの保全もままならない状況での拡張申請を反対する巡礼路愛好団体に対して、スペイン中央政府とバスク州政府の協力関係が拡張登録の決定打となったとされる。遺産登録の拡張をめぐる「会議場」ではさまざまなポリティクスが働いて

増殖する矢印

いる他方、「現場」ではどのような現象が起きているのだろうか。家の扉、鉄塔、地面。巡礼路沿いのあちこちには落書きのよう黄色いペンキで記された矢印がある。こうした矢印は、巡礼路愛好団体などが書き、サンティアゴを目指して歩く巡礼者が進路の手がかりとしているものである。およそ三十分歩き続けてもこうした矢印をひとつも



矢印が土産物のモチーフになることも多い。写真はピンバッジ。標本番号 H0231178

見かけなければ、道を間違えたということになる。土産物店にはこの矢印をモチーフとしたTシャツやバッグなどが売られている。巡礼路を示す矢印は、それだけ巡礼者に頼りにされて親しまれているものなのだ。

今日、保全や後世への継承が目的であったはずの遺産登録が、経済的な資源に挿げ替えられるなど、「会議場」と「現場」の乖離が文化遺産政策において大きな問題となっている。しかし現場で表出する具体的なイメージと、そこから遊離する宿命にある制度的な方向性が、思わぬところで重なるという、ややジョークめいたこともまたあったりするのだ。



地面に書かれた黄色い矢印

路から少し逸れたところに店を

構える人たちが、商機拡大を狙って巡礼者に足を向けさせるために「創作」した矢印である。矢印はまた、ときに道端で遊ぶ小さな子どもたちによって無邪気に「創作」されることもある。そして今日も巡礼者はそれらを辿って見知らぬ土地を遍歴することになる。国際機関や政府による理念的なマーカーで道が拡張されると並行して、巡礼路では、アクチュアルに総延長がマーカーで拡張されているというわけだ。